日文 701565870

寧齋野口寧斎著

三體詩評釋

東京 郁文舍發刊

明治四十三年六月三十日印刷
明治四十三年七月三日發行

正價金壹圓參拾錢

著作權所有

著者 故野口一太郎相續者 東京市赤坂區青山原宿百四十六番地 野口榮子

發行者 東京市京橋區柳町五番地 櫻井庄吉

印刷者 東京市京橋區木挽町貳丁目十三番地 新井由藏

發行所 東京市京橋區柳町 郁文舍
電話本局三千四百八十番
振替東京三百十番

三體詩評釋

緒言

三體詩は宋の淳祐庚戌周弼の撰ぶ所に係る、弼字は伯弼、汝陽の人、范晞文が對牀夜語に云く、周伯弼唐詩を以て自ら鳴ると、圖繪寶鑑補遺に云く、汝陽の詩人にして墨竹を善くすと、其當代知名の士たりしや、推して知るべし、物徂徠の之を目して一無名子書賈の輩となせる、恐らくは知らずして之を斥けたるものならんのみ、

伯弼何が故に此書を撰するや、曰く詩法を子弟に教へて以て當時の詩弊を矯正せんとせしに外ならざるなり、蓋し曾て之を論ず、宋の詩、西崑の穠麗に起り、承くるに子美の豪放、聖俞の高淡を以てし、大蘇に至りて大成す、軾が天禀の奇才を驅るや、縱横奔放、一氣にして呵成し、行雲流水、

意の至る所筆も亦隨ふ、前に古人無く、後に來者無し、黄秦晁陳、其得る所を以て其流風を傳ふ、南渡の後、尤楊范陸、相繼で倔起し、互に其長を行る、其風格の異なるは、固より言を待たずと雖も、要するに其主とする所は、自在に事を論ずるに在るのみ、斬新に事を叙するに在るのみ、其筆を使ふを舌の如く、手を著くれば春を成す、其弊や竟に油腔滑調を以て自ら喜ぶに至る、俚俗となり、平淺となり、卑近纖巧となる、誠齋を則ち好で俗語を使ひ、後村は則ち多く同朝の故事を用ふ、朱文公を〻て今人の詩は村裏の雜劇の如〻と痛嘆せしめたるもの、時に其極に達す、伯弼此際に在りて其弊を認め、則ち救ふに唐詩の韵致風趣を以てせんと欲す、其法度を立つるや律に於て四實を先とし絶に於て實接を先とす、其四實に於て云ふ、中四句皆景物にして實なり、華麗典重の中に於て雍容寛厚の態有りと、其實接に於て云ふ、實事を以て接すれば轉換力有りと、其意以

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

爲らく「初學之より入手して習の性となるや、句意充實して自ら趣味の盎然として盡きざる者あらん若し徒に勃窣理窟、以て足れりとなさば、終に諷詠すべき無きに至らんと、極力して之を闢く所以の者實に之に外ならず、范晞文云く、間々實に過ぐるもの有りて句の未だ飛健ならざる、或は窒塞の譏を起すことを得、然れども鵠を刻して成らざるも尙ほ鶩に類す、豈に空疎輕薄の爲に勝らずやと、充實の極、補綴堆垜に陷り、意味の乏きに至るは、亦免れざるの數なり、伯弱從て之を救ふに四虛を以てし、虛接を以てす、法度乃ち備はる、四庫全書總目嚴羽の滄浪詩話と並擧して、各當時に在て一義を明かにするものなりとし、均しく爲す有りて之を言ふものなりとす、其着眼の高きを謂ふべし

伯弱の此書を撰ぶや、詩法の貫通するもの此の如し、而して其撰ふ所の詩、往々人意に滿たず、且らく其撰ぶ所につきて之を見んか、杜律李絶、俱

に千古の絶調にして伯弱之を採らず、嗚呼、沈鬱、恠幻、百代に雄視し、風雨雷霆、猛獸奇鬼の如く、魂驚き魄動きて敢て逼視せず、杜律唐に在りて實に變調たり、而して爲くる所の五言長城亦地を拓くこと万里なりと、是れ施愚山の言にあらずや、七言絶句、語近く情遥に含吐して露われざるを以て貴しとす、只眼前の景口頭の語にして絃外の音有り、人をして神遠からしむ、太白在り焉と、是れ沈歸愚の説にあらずや、而して此書竟に之を見るなきなり、或は云く、此書原と題して唐賢三體詩法といふ、李杜二氏は詩聖なり故に餘子を以て唐賢となすと所謂る賢聖の區別は果して伯弱の本意に協ひたるや否を知らざれども殷璠の河岳英靈集已に杜を載せず、高仲武の中興間氣集姚合の極玄集李を併せて之を遺す、韋縠の才調集は二家の詩を以て撰定すべきものに非ずとし、楊伯謙の唐音は之を尊むに意有りて二家の詩を収めず、伯弱の李杜を録せざる蓋

し此の例に沿るのみ

何を以て之を言ふ、此書の載する所、杜牧雍陶韓翃張藉李涉王建の絶句に於ける、許渾盧綸李商隱の七律に於ける、王維賈島岑參劉長卿司空圖李嘉祐皇甫冉司空曙嚴維の五律に於ける、皆五首以上を錄して卷中の最たり、主として甄錄せるものは中晩に在れど然れども已に王維岑參二家を開列す、那ぞ李杜を貶して之を取らざるの理あらん、以て前說の謬ならざるを見るべきなり、而して李于鱗の秦時明月に於ける、王鳳洲の葡萄美酒に於ける、渠等が俱に推して唐絶の壓卷となすものにして、此書之を錄せず、王阮亭の擧ぐる所王之渙の黃河遠上、此書亦之を捨つ、沈歸愚の擧ぐる所李益の回樂峰前、柳宗元の破額山前、劉禹錫の山圍故國、杜牧の烟籠寒水、鄭谷の楊子江頭、此書其二を收めて其三を逸す、人各々見る所あり、正に互に相發明するに足る、此數家の如きは固より未た李

杜と其の例を同すべからざるものなればなり、

而し伯弱の中晩に偏する者、遂に何の意ぞや、初盛の雄麗莊重なるに及ばざる者、遂に何の意ぞや、他なし、伯弱の時、人皆斬新自在を以て詩の第一義なりとす、之に説くに初盛の詩を以てせんか、彼は將に謂はんとす、時代已に移る、古格を株守して新意を出す能はざれば雄麗莊重將た何の用ゆる所ぞと、伯弱茲に見る所有り、唐人中に就きて幽婉清空なる者を求め、茲に中晩唐身を現じて説法す、佛家の所謂る善巧方便なり、其撰ぶ所の詩調は高からずと雖も必ず適韻は古ならずと雖も必ず遠、而して意は則ち時人の道破せんと欲する所のものなり、時人の道破せんと欲する所のものにして行るに實接四實の法を以てし、空疎輕薄に流れずして新意を出すを得せしむ、學ぶ者入り易くして邪道に陷らず、是れ直ちに時人の壘を拔きて復言の反擊すべきなからしむるなり、嚴滄

浪云く、近代諸公、文字を以て詩となし、才學を以て詩となし、議論を以て詩となす、一唱三歎の音に於て歎なる所有りと、伯弼は則ち文字の詩才學の詩議論の詩を出すに、一唱三歎の音を以てせしめんとす、其勞や少くして其効や大なり、而して後學ぶ者得る所有らば、遡て李杜に入り終に初盛に及ぼす、亦何か有らん、元遺山の唐詩鼓吹、柳宗元劉禹錫を以て開卷第一とし、從て相次第す、遺山豈に盛唐諸家の詩を知らざるものならんや、而して其此の如きもの、亦たゞ時人の入り易きを求めて、時弊を矯正せんと欲したるに過ぎず、同じく是れ現身說法なりとふいべし、更に之を時勢に觀る、亦初學の幽婉清空なる者に待つあるを知るべし、蓋し淳祐庚戌は理宗御字の時にして、奸臣内を傷り、强敵外に逼る、其危きを累卵も啻ならず、然れども理宗は小人の擁立する所、曾て蒙古と合して金を亡ぼすや、意滿ち氣驕り、太平天子を以て自ら居る、武備に論無

し、經綸の大策、亦之を講ずる無く、唯周程張朱の學を崇尚するを以て任じ、右文の譽を期するのみ、顧廻瀾の之を評して理宗の理は文なるのみと言へるもの、眞に其痛切なるを覺ゆ、而して上の好む所已に此の如し、下の靡然として風を成し、文學蔚然として起るもの、亦恠むに足らず、詩人の時務を知らざる者、皆無事に慣れて詩酒流連、維れ日も足らず、以て昇平を謳歌すと爲す者、到る所皆是なり、伯明も亦徒を聚めて詩を講ずるものなり、朝日感懷する所の者は村舍田園、閑適自放の具にあらざるは無し、學ぶ者も亦雄麗莊重に要するなきなり、是れまた時勢の然らしむる所なるのみ、此れを之察せずして、漫に其撰を尤むるは時に通ぜざるの論なるのみ、況んや其現身說法するものなるに於てをや、

然れども、唐詩博し、三體の得て之を盡すべきにあらず、識力俊邁なるもの、才藻富贍なるもの固より之を長篇大作に望むの勝れるに如かず、總

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

目に云く、宋末風氣日に薄く、詩家多く古体に工ならず、故に趙師秀の衆妙集、方回の瀛奎律髓、錄する所の者、近体に非ざるゝ無し、彌の此意亦た復た相同じと、伯弱既に廻瀾を以て任ず、何ぞ古詩を撰ひて時人頂門の一針とふさいるや、其意乃はち知り難からず、古詩の深奥なる學を要し識を要す、初學の望て却走せざる者は少し、近体は句短くして意長く、尤も人耳に入り易し故に先づ之を藉りて津筏と爲すのみ、對牀夜語、伯弱の言を錄して云く、詩を言ふは唐に本づくも、唐に固なるに非ず、河梁の後、詩の變唐に至て止まるなり、謫仙號して雄拔と爲す、しかも法度は最も森嚴なり、況んや餘者をや、立心の專ならず、用意の精ならずして、其妙に迨らんと欲するも能はざるなり、元和は蓋し詩の極盛にして、其實ゝ体製是より始て散ず、僻字險韵以て富と爲し、率意放詞以て通となす、皆其漸有り、一變して五代の陋を爲すと、深く其語を味へば、其詩に於て復

眼を具する者推知するを得べし、而して此書の三体に止まるもの、實に初學に教ふるが爲めなり、清の高士奇數百年の後に起りて、五七古五排の唐詩を撰し、續三体詩を作る、是或は伯弱の深意を得たるに庶幾からんか

而して伯弱の法度を講ずる、方虛谷此書に序して之を刺る、其言に云く、三体法なるもの、專ら四韵五七言小律の爲に設く、以爲らく一詩の法有り、一句の法有り、一字の法有り、此三法に止まる、而して後江湖に詩人無しと、夫れ詩の一字一句強て法度に拘泥すべからざるは固とより虛谷の言の如し、然れども、古人の作る所、何ぞ法度に愜はざらん、之を釋きて理會せしむるは、眞に後學を導くの捷徑なり、若し法度の講ぜざる者有らんか、初學恐らくは任意揮灑して支離滅裂たらんのみ、古人の詩、求めずして法度に合す、始よりして規矩準繩なきものに非ず、是れ尤も初學

に會得せしむべきの所にあらずや、紀曉嵐瀛奎律髓を評して云く、虛谷其本原を置きて其末節を拈す、每篇一聯を標擧し、每句一字を標擧し、將に天下の人を擧げて力を之に致さしめんとすと、其詹々自ら喜ぶ者此の如し而して、江湖に詩人無しの一語を以て此書を抹殺せんとす、眞に耳を掩ふて鈴を盜むの類なるのみ、至論に非ざるなり、楊子云く木を斲して棋となし、木を梡して鞠となす、皆法有りと、木尙ほ且つ法有り、詩を敎ゆるに法を以てす、何の不可なる有らんや

總目に曰く「列する所の諸格、尤も詩の變を盡くすに足らず」と是れ伯弼の責を免れざる所なるべし、其虛實相救ふの法、當時の痼疾を醫するに足るも、諸格分ちて精ならず、合して嚴ならず、其數首を標擧して理由を明示せざりしもの、抑〻何の意ぞ、合するに文字の相似たる者を以てして、殆ど蔡蒙齋の聯珠詩格と其轍を同くする者、抑〻何の意ぞ、凡そ此の如き

のもの、胡應麟をして牽合支離なりと評下せしめたる所以なり、然れども、余は尙ほ范晞文が此の書を評して是編一出、後學に補なしとせず有識高見の卓として時習に熏染されざるものは往々此に於て解悟すと云へるの語に左袒し微瑕の白璧を傷つくるに足らざるを思ふなり

此書釋圓至の注、斐庾の增注、尤も世に行はる、邦人の此書を箋釋せしもの、熊谷立閑の備考大成を以て最となす簡册浩瀚にして材料富贍なり、曩に材を之に徵し、三体詩釋義を作り、中途にして止む、今にして之を見れば誤謬誠に尠少ならず、今や更に諸書を參觀し、師友に正して初學の爲に聊か之が評釋を爲す、然れども、余の才の學の疎にして淺なるを以て、加ふるに時日に乏し、後の今を見るを、今の昨を見るが如き、或は當さに然るべきものあらん、且つ夫れ老優の舊劇を演ずるや、其一舉一動、先人の摸型に出でゝ易ゆべからざる者有り、知らずして其可否を月旦せ

ば、其正鵠を誤まりて優の笑ふ所とならざる者、夫れ幾何ぞや、此書の海内に風行するや久し、諸老先生各一家の秘鑰を以て之を啓發するもの多かるべし、余や後進を以て所聞するもの稀なり、而して卒然として筆を執る、先生の嗔る所となり、後生の笑ふ所となる、亦免れざるの數なるべし、識者高敎を慳むなくんば幸甚なり

癸巳三月下浣　　寧齋主人　識

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.